2018年火星大接近

桑田直宏

火星はおよそ 2 年 2 か月ごとに地球に近づきますが、火星の軌道が楕円になっているため、かなり接近するときとそうでないときがあり、見かけの大きさはかなり違います。大接近はおよそ 15 年に 1 回となり、次回は 2008 年 7 月 31 日に最接近を迎えます。

どのくらい近づくかというと 5759 万キロメートルで最大視直径が 24.31 秒角になります。今年の接近が 7528 万キロメートルで 18.60 秒角なので、今回より 3 割大きく見えることになります。それでも最大の惑星である木星の半分程度の見かけの大きさです。いかに火星が小さいかということになりますが、火星は地球のように大気があり、実際に望遠鏡で観察すると模様や雲、白い極冠(ドライアイス）が変化するのがわかります。火星にまだ探査機が飛んでいないはるか昔、望遠鏡で火星観測したローウェルが運河らしき模様から火星人の存在を信じたというのは有名です。火星人の存在は否定されましたが、今でも望遠鏡で観測してみると、火星は神秘的な何かを感じる惑星だと思う。

前置きが長くなりましたが、2 年後の大接近に向けて望遠鏡を整備しました。まずは自宅のベランダに設置しているタカハシ NJP 赤道儀のモータードライブを最新に交換した。さらに中古で購入した ALTER- 7 N(18 センチ）望遠鏡をヨシカワ光器でクリーニングと光軸修正、そして鏡筒内部を黒の艶消し塗装をしてもらいました。

修理から帰ってきた望遠鏡には代表の吉川さんから、この望遠鏡の検査結果資料が添付されていました。それによると、この望遠鏡はトップクラスの光学性能を持っているとのこと。(別紙参照)

日本のシーシングでは、この 18 センチぐらいが一番能力を発揮する口径だとか。惑星を見るために設計されたこのロシア製望遠鏡でどんな火星を見せてくれるか、今から楽しみにしています。